

〈いのち〉の医療としてのマニュアルメディスン 第1回目

NPO 法人場の研究所

仙台徒手医学療法室 SORA 本多直人

はじめに

東日本大震災から、はや6年を迎えようとしています。昨年も熊本、鳥取など各地で大規模の震災が起こり、夏には台風や大雨による深刻な水害、そして火山の噴火と大きな災害が続いています。甚大な被害の状況を目にする度に被災された方々の心痛を想い、私たちの棲むこの日本という国がいかにも自然災害の多い国であるかということに改めて実感させられます。

特に福島原発の放射能汚染による甚大な被害は、今も先の見えない状況は変わらず、私たちにとって最も大切な居場所としての地球の未来にも大きな課題を突き付けています。世界に目を移してみると、一部の国の経済の拡大とともに貧困の格差も拡がり、環境問題も深刻さを増しています。

「イスラム国」に象徴される中東における戦争は、ますます激しさを増し、宗教間の対立もこれまでに感じたことがないほどに拡がりを見せ、罪の無い、戦闘とは無関係な人々、そして子供たちの命が毎日のように奪われ、私たちの未来に暗い影を落としています。

このように世界のあちこちで起きている様々な出来事は、いまや他国の出来事として無関心でいる訳にはいかなくなってきました。こうした出来事は私たちの日々の暮らしにも深く結びつき、得も言われぬ不安感や、言葉にならない世界の空気感といった目に見えないかたちで、心身にも影響を及ぼし始めているように感じることもしばしばです。

私たちは既にどんなに身近な出来事も、世界を、もっと言えば地球という最も大切な私たちの「居場所」を心に映し、近づけて考えながら、これからの未来を築いていかななくてはならない時代に入っているのです。私は2005年より大場弘先生のご紹介で、NPO 法人場の研究所と関わることになり、以来、清水博研究所所長の下で、場の思想、哲学、科学について実に多くのことを学ばせて頂きました。

研究誌の紙面におきましては、こうした学びと私自身の臨床の体験を元にして「〈いのち〉の医療としてのマニュアルメディスン」をテーマに、2009年の日本カイロプラクティック徒手医学会のワークショップに向けて書いた論文「〈いのち〉の技術」に現在の考えを加えながら、臨床での体験と理論の両面からこれからの日本のマニュアルメディスンを描いていきたいと思っています。

居場所づくりのケアー

私たちの臨床では、様々な痛みや苦痛を抱えた方がいらっしやいます。特に不定愁訴と言われる痛みの殆どは、心身の分けられない問題として存在しています。この問題を手繰っていけば、必ずと言ってよいほど、居場所の問題、そして〈いのち〉の問題に突き当たります。

これまでの私の臨床の場でも、腰痛や四肢の痛みなどの一般的な症状の方はもちろんですが、その他にも、家族間の関係、職場での関係がうまくいかないことから拒食症や心身症、うつ病と言われるような状況へと追い詰められてしまった方、末期の癌によって死を前にした方、重い脳の障害をお持ちの方、そして東日本大震災後の強い不安など、それぞれに本当に複雑な苦悩を抱えて深刻な身体の不調を訴えられる方々に出会ってきました。

こうした不調を抱える方々に対して、始めからそれぞれの居場所における問題を排除して「客観性」の元に筋骨格系、神経系、循環系などの問題に限定して検査をし、徒手医学療法を進めることももちろん、ある程度は可能です。それなりの効果も期待できると思います。しかし、やがて心を許しあい、いろいろな出来事を話し合えるような信頼関係が生まれてくるころには、検査や診断ということだけでは到底収まりきれず、機能という一面では決して推し量ることの出来ない、一人ひとりの存在の問題に突き当たるのが殆どです。結果、効果という限定的な変化を大きく超えて、患者さんの痛みや苦しみが和らいで一緒に喜びを感じられるときもあれば、私たちの力だけではどうにもならないこと、無力さに悔しい思いをすること、時には一緒に悲しむしかないこともあります。

私自身、開業し臨床に携わって25年以上になりました。徒手療法を始めるときに、「マニュアルメディスンを通じて一人でも多くの方を救済したい」という志を立てて今日までの臨床を続けてきましたが、振り返ってみますと、実際には私が救済をするのではなく、患者さんに私自身が支えられ、心を救われ、今も一緒に人生を歩かせて頂いているのだということをつくづく感じます。こうした生かされて生きてきた日々の体験が、居場所づくりに向かうケアーへの想い、そして〈いのち〉への問いかけをさらに深めていきたいと願う一つの出発点ともなってきたように思っています。

共存在の深化とマニュアルメディスン

場の研究では、その思想の根幹に、「共存在の深化」ということがあります。

(この詳細については、場の研究所所長の清水博先生の著書、「〈いのち〉の自己組織」を是非ご一読ください。) それは先に述べた居場所についての理解を

より深めてくれるものです。

例えば、地球は私たちにとっての大きな居場所です。ここでの「共存在の深化」とは、私たち人間だけではなく、この地球という大きな居場所の〈いのち〉を紡いでいるあらゆる生きものたちと共に存在を深めあっていくということであり、それは互いがその違いと必要性を認め合いながら、共に生きていくこと、居場所の〈いのち〉を深め合っていくということを意味しています。

ここで居場所の〈いのち〉という言葉を使わせて頂きましたが、「命」ではなく、〈いのち〉であることには意味があります。清水博先生は、〈いのち〉とは「**存在を続けようとする能動的な生き**」であると述べられています。（私たちが日常的に使ってきた「生命」や「命」という言葉は物質的な細胞の集まりを意味する名詞的な言葉になってしまいますので、生きという動詞的な意味を含んだ〈いのち〉とは大きく異なっています。）清水先生が述べられているように、「存在を続けようとする能動的な生き」として〈いのち〉ということ捉え直してみると、私たち一人ひとり体に〈いのち〉があるように、居場所にも〈いのち〉があることがお分かりいただけると思います。

では皆さんは「居場所」というと、どんな場所が浮かんでくるでしょうか？居場所は決して目でみることも測定器で測ることも出来ないものですが、ごく自然に私たちが感じる事が出来るものです。それは、家だったり、仲の良い知人、友人と語り合える場所だったり、仕事場であったりと様々だと思います。中には、懐かしい故郷や思い出のある場所を思い浮かべる方もおられるでしょう。今この紙面をご覧の先生方の治療の場にも、居場所を感じてらっしゃる患者さんがおられるかもしれませんね。

このように居場所には、大きな居場所もあれば、小さな居場所もあります。そしてそれぞれの居場所は、大きな居場所ともつながっていますから、重層的なかたちをもっているということが言えます。そして、それぞれの居場所においても、地球と同じように、「共存在の深化」ということがとても重要になってきます。

あたたかな居場所には、包まれるような深い安心感が生まれています。それは先に述べたように居場所にも〈いのち〉があり、共存在が深まってその〈いのち〉が生き活きとして続いているからなのです。しかし、居場所になんらかの問題が起こり、綻びが生じてくると、共存在という状態がつかれなくなります。こうした状況が続くと、いつの間にかお互いに譲り合えるような心が薄れ、自己中心的な心が強まって、その関係もぎくしゃくして不安定になり、そこに居ることが苦痛になったり、日々を生きていくことへの不安や苦悩、身体の痛みなどが次々に生じてきたりすることにもなるのです。

もちろん、マニュアルメディスンで重要視される傾向のある大脳皮質のはた

らきもこうした問題の影響を大きく受けることになり、自律神経から波及するような多彩な症状を呈する不調につながってくることは想像に難くないと思います。このように居場所の〈いのち〉と体の〈いのち〉は切り離すことの出来ない関係にあるのです。

先日、ある患者さんが、最近、ご近所さんや知人のトラブルが増えて、その愚痴を毎日のように聞かされているうちに、影響がご自身にも及んで体調が悪くなっているように感じていることを話してくれました。中でも「最近、小さなワールドが次々に壊れてきてますよね」としみじみ話された言葉は、ここで取り上げた現代の居場所の問題をそのまま現しており、その危機感がますます拡がり続けていることを強く感じさせられました。

このような居場所におけるトラブルは、共存在を深めることによってしか解決させていくことは出来ません。では具体的にどのようなすれば、共存在を深めて居場所の〈いのち〉を豊かにしていけるのでしょうか？

そのために、徒手療法を通じて私たちに何が出来るのでしょうか？ここに明確な思想をはたらかせながら、深く問いかけていく努力を重ねていくところに新しい時代のマニュアルメディスンの方向性が照らされ、切り開かれていくものと思っています。そして共存在を深化させる方向にマニュアルメディスンの研究が創造的に進められているのかどうかということが、これからの私たちの研究の確かな羅針盤となっていくものと私は確信しています。

〈いのち〉の技術としての方向性

近代の医学は、画像診断や、遺伝子の解読などの高度な技術を大変な速さで発展させ、私たちもその恩恵を大いに受けています。神経科学の発展によってここ20年の間に徒手医学の分野の技術も大きく様変わりし、この分野においては当研究会の大場先生のご努力によって様々な神経学的な介入とアプローチの可能性を拡げていくことが出来たということは大変大きな功績であったと思います。

身体の構造や機能が、細分化され、視覚的にも非常にクリアな分析が可能となった世界は、とても魅力的でもあります。しかしながら、私たちを取り巻く患者さんの全ての問題がこうした近代医学的な方法で全て理解され、解決されるという訳ではないということも、臨床家の皆さんであれば、既にどこかでお感じになっておられるのではないのでしょうか。それは、研究が進んでいない、あるいはこれから研究を進めれば分かってくるということを含めても、やはり、大きな課題が残されているところではないかと思われまます。

近年、世界的にも、代替医療に関しては実に多くの研究がなされてきているようです。にもかかわらず、未だに、その研究の多くが近代医学的、近代科学

的な視点に見合ったものであるかどうかの判断が中心になっており、近代科学そのものの視点に関する様々な問題点については、問われることが少ないように思います。優れた検査技術が進むこと自体に私は決して否定的な立場をとっている訳ではありませんが、それだけでは、患者さんの「苦しみ」や「心の痛み」はもちろん、私たちが体験する「治癒」ということを説明するには至っていません。

一人ひとりが抱える「苦しみ」や「痛み」を、脳内の生理的変化を測定するように、物質的な一面だけ取り出して、分析し、原因と結果のようなかたちだけで理解していくことは出来ません。治癒ということを考えてもそれは同じことが言えます。治癒には、一人ひとり異なるかたちがあると言っても決して過言ではなく、私たちの予想を超えて起こることも決して少なくありません。それは様々なかたちでの心の転回を伴いながら、ときに劇的に、ときにとても緩やかに起こってくることもあるのです。

私はこれまでのこうした体験から、むしろ物質としては見えないけれども、確かに感じられる、感じ合うことの出来る「場の感覚」をととても大切にしています。それは臨床の体験の中で、おのずから導かれてきたものでもあり、ここに踏み込まずして、患者さんから直に学ばせて頂いた貴重な知恵と技術を語ることは出来ず、未来に向けた徒手医学療法の在り方を語ることも出来ないのです。

共存在を深化させる方向に私たちの技術が向かうとすれば、それは効果があるかないかという一定の基準を満たす方向ではなく、治る、治らないを超えて、患者さん一人ひとりの違いを認め、互いに寄り添い合いながら共に生きていくための新たな時代のケアのかたちを創造していくことではないでしょうか。

私は、マニュアルメディスンとしての身体呼吸療法を入り口として、様々な実践をさせて頂きながらの臨床経験を通じ、ますます、この〈いのち〉の医療、〈いのち〉の技術とは何かを考えていくことの重要性を改めて痛感しています。

身体における共存在の原理と二重生命

大場弘先生はこの機関誌99号の紙面で、マニュアルメディスンのトライアングルとして結合組織、体液循環、神経系の協調的な関係の重要性について貴重なご提言をされています。身体という居場所の〈いのち〉は、こうした多様で協調的な活きを自己組織し、統合している「見えない活き」なのです。

先に述べた「共存在の原理」は、私たちが感じている居場所だけにはたらいっている訳ではありません。私たちが治療している身体もまた、60兆から100兆といわれる細胞たちにとっての大切な〈いのち〉の居場所であり、ここに

も共存在の原理がはたらいっているのです。

居場所としての身体の〈いのち〉の状態が悪ければ、細胞たちのはたらきも悪くなります。細胞たちの〈いのち〉の状態が悪くても身体の〈いのち〉は元気になることが出来ません。その反対に、身体の〈いのち〉の状態が良くなれば、細胞も元気になり、身体はその元気になった細胞から〈いのち〉を与えられてますます元気になります。このように身体の〈いのち〉と細胞の〈いのち〉がうまく循環し、共存在の状態が深まることによって、〈いのち〉が力強く継続していくのです。

この身体の〈いのち〉と細胞の〈いのち〉の関係のように、二重性を持った〈いのち〉の在り方を、「二重生命」といいます。居場所の〈いのち〉が深まっていくこと、壊れてしまうことは、この「二重生命」の状態が上手く循環しているかどうかということから起こってくるものであるということが言えます。

「二重生命」は、生命現象とは何か？という問題を、生命の間にある情報、関係性という生命科学の立場から究明を進めてきた清水博先生の最も貴重な発見とも言えるものです。

二重生命を柱とした「場の科学」は、近代医学的な視点では捉えきることのできない、私たちがこれまで、深めてきた身体の世界、そして日頃、経験的に捉えているような見えない活きを表現する上でも、又、ケアの技術の創造とその可能性を拓けていく上でも大きな力となる「統合の科学」でもあるのです。

私たち、場の研究所では、清水博所長の提唱する「〈いのち〉の二重構造論」の元に新たに〈いのち〉の医療の分野が開拓されつつあります。

〈いのち〉の医療に向かって

〈いのち〉の医療とは重い病気、ハンディキャップ、高齢などによって、科学的な近代医療の方法だけでは生きていくことが困難な人びとの〈いのち〉を、「〈いのち〉の与贈循環」の活きによって支援することを目的とする医療である。

支援を受ける人びとを中心的な「役者」とする「〈いのち〉の即興劇」の「舞台」となる適切な居場所を共創することにより、そのドラマによって〈いのち〉の与贈循環の活きが生みだすことが〈いのち〉の医療の方法である。ここには、支援を必要とする当人以外にも、その人の支援に行き詰まって、共に生きていくことが困難な状態になっている人びとも含まれる。

この〈いのち〉の医療は近代医療を否定するものではない。近代医療による治療も、〈いのち〉の与贈循環を助けるように編集されて、〈いのち〉のドラマに適切に取り入れていくものである。と清水先生は述べられています。

私たちがケアの技術について考えるときには、どうしても最初に「徒手療法ありき」から出発してしまうことが多いのですが、実はそれは必ずしも豊かな居場所づくりにつながっていくとは限りません。まずは、最初に〈いのち〉の舞台としての「居場所」があって、その居場所の〈いのち〉を育むように、共存在を深化させていくということが大切なのです。そしてその舞台の中に、それぞれの技術が位置づけられるならば、技術もまた創造を生み出しながら深まっていくものと思います。

〈いのち〉を観る目をもって触れる手は、私たちの内側にある共存在に向かう心を深め、居場所の〈いのち〉をより豊かにしていく道へと導いてくれるように思います。それは、私たちの仕事のやりがいや生きがいにもつながってくるはずです。私自身も、これまでの臨床での体験と学びの中で得られたことについて、出来る限り忠実な表現に努め、日本から世界に向けて発信のできる〈いのち〉の医療の技術としてのマニュアルメディスンを未来に描きながら、これからの一步を重ねていきたいと思っています。

なお、「〈いのち〉の医療とは」の中で述べられている「〈いのち〉の与贈循環」「〈いのち〉の即興劇」については、思想の骨組みとなる重要なことですので、次回以降、少し時間をかけて、臨床での体験と照らし合わせながら、深めていければと思っています。

■ NPO 法人場の研究所所長 清水博先生からのメッセージ

病気に苦しむ人びとを思いやる、本多直人先生の温かい思いやりと真摯な態度にはこころを撃たれます。そしてそれが〈いのち〉の医療を開こうとする熱い思いへとつながっていきます。長い年月にわたるお付き合いから、私が感じている本多先生の間人像を一口で言えば「嘘を言えない人」です。

私たちの意識の活きを、大脳新皮質の活きに一応対応させて考えてみると、その意識が感じる「深い存在」とは、新皮質の基底になっている旧皮質、さらには新旧両皮質を含めて中枢神経系を支えている身体の「内在的な活き」に相当します。ここで意識の裏側にあるために、意識によって直接的には自覚できない活きが身体の内在的な活きです。また意識によって自覚されている身体の活きは「外在的な活き」です。したがってこのことから、「共存在を深める」とは、分かりやすく言えば、人とのつながりを、脳の活きがつくる外在的なつながりから、身体の内在的な活きによるつながりへと、つながりのあり方を移していくということです。そのようなつながりには、人間以外の生きものとのつながりも含まれます。

身体の中に内在的なつながりが自然に生まれることを、私は「〈いのち〉の自己組織」と名づけています。ここで言うまでもなく、〈いのち〉の自己組織はマニュアルメディスンにとって最も重要な活きです。また人間の身体を構成している莫大な数の細胞の活きの間のつながりも内在的ですから、〈いのち〉の自己組織です。〈いのち〉の自己組織は、(意識で直接的に捉えられない) 暗在的な活きであることから、ちょうど科学的な研究の陰になるために、人間が健康に生きていく上でもっとも重要な基盤でありながら、科学によってはほとんど解明されてこなかったのです。

しかし本多直人先生が強調されているように、生きものはその〈いのち〉の自己組織によって、居場所の〈いのち〉を自己組織しつつ、その居場所の〈いのち〉に包まれて、はじめて安定に存在することができるのです。これが二重生命、すなわち〈いのち〉の二重構造です。私たちについて言えば、その生きものとは人間であり、またさらにその身体を構成している60兆にもおよぶ多数の細胞です。私たちは居場所と人間、人間と細胞という二重の二重生命の接点になっているのです。病気とは、この二重の二重生命によって生まれる居場所、人間、細胞の間の〈いのち〉の共存在性が崩れて不安定になることなのです。その安定性を回復するためには、〈いのち〉の与贈循環を支援することが必要なのです。